イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第三巻　狙われたイケメン教師

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　飛び込み台で裸踊り
■海老沢薫　BLOG
■海老沢薫Web連載小説

※海老沢薫　BLOG
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・サイドストーリー『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「イケメン教師の受難　伝説の水泳大会篇　第三巻　狙われたイケメン教師」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

高校の水泳大会で四百メートルリレーを一人で泳がされ、最下位になったイケメン教師の三神真琴は、罰ゲームとして飛び込み台の上で裸踊りをさせられることになった。

両手を頭の後ろで組み、逞しい肉体のすべてを全校生徒や同僚教師達に晒しながら、引きつった笑顔を浮かべて腰を振り乱すその姿は、見る者の欲情を煽り立てずにはいられなかった。

「よっ、変態教師！」

「先生、生徒の前で裸踊りしてそんなに嬉しい？」

「露出狂の先生、水泳大会で裸踊りできて良かったね！」

プールサイドにいる生徒達はイケメン教師のあられもない姿に熱狂し、次第に水泳大会はイケメン教師の陵辱ショーと化していった。

十分近くもの間続いた屈辱の罰ゲームがようやく終わりホッとするのも束の間、プール

サイドのスピーカーから衝撃のアナウンスが流れ、真琴は新たな羞恥地獄へと誘われる。

なんと次の競技である三年生男子の水球に真琴は一糸纏わぬ姿のまま強制参加させられることになったのだ。

「先生、そのデカ○ンを引きちぎられないように気をつけるんだぞ！」

「それから先生の玉も間違って投げられないようにちゃんとガードしろよ！」

プールサイドの生徒達からは冷やかしの声が飛び交い、真琴は不安に怯えながら次の競技の列へと並んだ。

やがて、水球の試合が始まると、味方チームの生徒達は素っ裸のイケメン教師にパスを集中させ、ボールを持った真琴は敵チームの生徒達から一人狙われることになり・・・。

「あぁっ、やめてくれ・・・あぁぁっ」

水中で敵チームの生徒達に下半身を好き放題に弄り倒された真琴は、プールのど真ん中で激しく悶え狂った。

而して、イケメン教師は水球の試合中に幾度となく果て、プールサイドで観戦する生徒達はその度に歓声を上げ熱狂した。

それでも真琴のチームは決勝まで進むことになり、ついに迎えた決勝戦では、いつしか敵も味方も関係なくプールの中にいる全員がボールではなくイケメン教師の体ばかりを狙い始め・・・。

■第一章　飛び込み台で裸踊り

高校の屋外プールでは年に一度の水泳大会が行われ、プールサイドを埋め尽くす全校生徒の異様な熱気に包まれていた。ただ、その熱気は白熱した競技によるものではなかった。

ついさっき終わったばかりの二年生による四百メートルリレーにおいて、二十五歳のイケメン教師、三神真琴が教師であるにも関わらず素っ裸で参加し、一人で四百メートルを背泳ぎだけで泳ぎ切ったからだった。

イケメン教師がその逞しい肉体のすべてを晒しながらプールの中を懸命に泳ぐ姿は、プールサイドで観戦する全校生徒や同僚教師の欲情を刺激し、男も女も関係なく、皆、興奮を抑えきれなくなっていたのだ。

さらに、最下位になった真琴には屈辱の罰ゲームが科せられることになり、その驚愕の内容がプールサイドのスピーカーを通じて発

表されると、全校生徒や同僚教師達の興奮のボルテージは最高潮に達した。

「三神先生、これ以上水泳大会の進行を妨げないでくれ！ほら早くプールから上がりなさい！」

真琴がいつまでもプールの中で項垂れていると、ベテランの男性教師がプールサイドから強い口調で叱責した。

「は、はい・・・」

真琴は申し訳なさそうに謝ったが、これから屈辱の罰ゲームを実行しなければならないと思うと、とてもプールから上がる気にはなれなかった。

「おい先生、早く上がれよ！このまま上がらないなら先生の恥ずかしい動画をネットで拡散するからな！」

今度は真琴が担任するクラスのクラス委員である相葉が、そう言って脅迫した。

「そんな・・・」

クラス委員の相葉から脅迫された真琴はさすがにたじろいだ。

自分の恥ずかしい動画がネットを通じて世界中の人々の目に晒されるような事になれば、これからの人生を一体どんな顔して生きていけば良いのか、真琴には全く分からなかった。

だからそれを思えば、またこの学校の生徒や同僚教師達の前で恥を晒した方が遙かにマシなように思え、真琴はついにプールから出る覚悟を決めたのだった。

イケメン教師が再び素っ裸でプールサイドに現れると、全校生徒は露骨な視線をその逞しい肉体の隅々にまで向けた。あぁっ、お願いだからそんな目で見ないでくれ・・・。生徒達のギラギラした視線が全身に突き刺さるのを感じた真琴は、大きく膨らみ始めたイチモツを両手でしっかりと隠した。

『それでは三神先生、中央の飛び込み台の上にお上がりください』

プールサイドのスピーカーからアナウンスが流れると、真琴は両手で股間を押さえたまま、ゆっくりと飛び込み台の上に昇った。

あぁっ、恥ずかしい・・・。素っ裸で飛び込み台の上に昇った真琴は、まるで処刑台の上に立たされたような気分だった。

『それではこれより三神先生の罰ゲームを執行いたします。三神先生、プールの方に背中を向けて、両手を頭の後ろで組んでください』

進行係の女子生徒が事務的な口調でそう告げる声がスピーカーから響いた。

処刑台の上に立つ真琴は死刑執行を言い渡されたような絶望感に苛まれながら、飛び込み台の上で体を反転させると、両手を股間からゆっくりと離し、頭の後ろで組んだ。

「アハハッ、またあんなに大きくしてやがるぜ」

「いくら露出狂だからって、ホントにしょうがねぇ野郎だな」

真琴の正面側に立っている同僚教師達は、イケメン教師の大きく膨らんだイチモツを見ると呆れたように罵った。

あぁっ、恥ずかしい・・・。正面側に立つ同僚教師や競技の記録係を務める生徒達に勃起したイチモツを見られてしまった真琴は、どうしようもない羞恥に喘ぎ、思わずイチモツを痙攣させてしまった。

『それでは三神先生、そのままお尻を左右に振ってください』

進行係の女子生徒は相変わらず事務的な口調でイケメン教師に指示を出した。

真琴はあまりの屈辱に唇を噛みしめ、二、三度小さく深呼吸をしてからお尻を左右に振り始めた。

「オオッー」

イケメン教師の卑猥な裸踊りを見た生徒達の間から感嘆と驚きの唸り声が響き渡り、続いて至る所から笑い声が漏れた。

「アハハッ、なんだよアレ、めっちゃ面白いんだけど（笑）」

「教師が水泳大会であんなセクシーなダンスをしても良いのかよ（笑）」

「なんかあそこまで変態だと逆に笑えるぜ（笑）」

生徒達のそうした笑い声は飛び込み台の上で踊るイケメン教師の耳元まで届き、真琴はイチモツをさらに勢い良く尖らせていった。

『それでは三神先生、次は腰を大きく回転させてください』

暫くしてプールサイドのスピーカーから新たな指示がアナウンスされると、真琴は再び唇を噛みしめ、それまで左右に振っていた腰を今度はグラインドさせ始めた。

「アハハッ、やべぇ、さらに面白くなった」

「アイツ本当に教師かよ（笑）」

「アレ絶対喜んでやってるよな（笑）」

プールサイドには生徒達のさらに大きな笑い声が溢れ、腰をグラインドさせるイケメン教師の心を苦しめた。

イケメン教師の正面側にいる生徒や同僚教師達は、股間のど真ん中で勇ましく反り立つイチモツが腰のグラインドに合わせて揺れる様子を面白そうに眺めていた。この端整な顔立ちと逞しい肉体を兼ね備えたイケメン教師は実は本物のド変態野郎に違いない、誰もがそう思い込み、もはや屈辱の罰ゲームを受けるイケメン教師に同情する者など誰一人としていなかった。

暫くして、プールサイドのスピーカーから真琴に対してまた新たな指示がアナウンスされた。

『三神先生、それでは今度は反対側を向いて腰を左右に振ってください。それから、表情が堅いので笑顔でお願いします』

進行係の女子生徒のアナウンスが流れ終わると、プールサイドはさらにざわついた。なぜ

なら、プールサイドを埋め尽くす大勢の生徒達はこれでイケメン教師の卑猥な裸踊りを正面側から拝むことができるからだった。

真琴は胸の奥に込み上げる羞恥を必死に堪えながら飛び込み台の上でゆっくりと体を反転させていった。一体この罰ゲームはいつまで続くんだ・・・もう許してくれ。真琴は心の中で泣き叫びながら、今度は大勢の生徒達の方を向いて腰を左右に振り始めた。

「オオッーすげぇ！ビンビンのアソコが揺れてるぜ！」

「キャッー、三神先生へんた～い！」

プールサイドには男子生徒の歓声と女子生徒の悲鳴が交錯し、真琴はその渦の中で軽い目眩を覚えていた。

同じ飛び込み台の上で踊っていても、体の向きを変えただけで天国と地獄ほどの差があった。

『三神先生、笑顔でお願いします』

真琴が強張った表情で踊っていると、スピーカーから再び進行係の女子生徒の声が響いた。

「ほら先生笑って！」

「先生、ちゃんとやらなきゃダメだろ！」

プールサイドの生徒達からもイケメン教師に笑顔を求める叫び声が響き、真琴は処刑台の上でもはや笑顔を浮かべるより他なかった。

そうして、飛び込み台の上に立つイケメン教師は、腰を左右に振り乱し、股間のど真ん中で反り立つイチモツを激しく揺らしながら、ゆっくりと口角を上げ引きつった笑みを浮かべていったのだった。

「オオッー」

イケメン教師が卑猥な裸踊りをしながら笑顔を見せると、プールサイドに今までで一番大きな生徒達の唸り声が響いた。

「よっ、変態教師！」

「先生、生徒の前で裸踊りしてそんなに嬉しい？」

「露出狂の先生、水泳大会で裸踊りできて良かったね！」

生徒達からそうした冷やかしの声が次々と浴びせられると、真琴は思わず笑顔を崩してしまい、すぐにプールサイドからヤジが飛んだ。

そのため、飛び込み台の上に立つ真琴は引きつった笑顔をずっと浮かべながら素っ裸で腰を振り続け、その姿は誰がどう見ても露出狂のド変態野郎にしか見えなかったのだった。

■海老沢薫　ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・連載小説『イケメン社長　聖哉２５歳―体を賭けた屈辱の取引―』や最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195

・・・二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドル的存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝　二十歳の憂鬱』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764

・・・大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罠に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。

それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。

数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。

今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることにな

り・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をすることになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、一糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていき、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　―体を賭けた屈辱の取引―　大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・・・吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　一体で償う屈辱のクレーム　会議室篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623

・・・２５歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であった。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入った。取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を起こした当事者である聖哉の会社の社員が現れ・・・。

平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈辱的な命令を突き付ける。

社長としてのプライドだけでなく、一人の人間としての尊厳までも奪われるような命令に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが、自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地獄へと堕ちていくのだった。